まぁ、そんなワケで

林檎を剥いて歩こう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
まぁ、そんなワケで

【Ｎコード】
Ｎ２６５０Ｒ

【作者名】
林檎を剥いて歩こう

【あらすじ】
とあるきっかけで、魔界に行っちゃった主人公が起こすストーリー！
そして巻き起こる恋愛ストーリー！？

No，0001　始まりのポイント

朝、目が覚めたら、俺の布団の中に妹がいた。

妹がいた

妹がいた。

俺「なんでお前がココ（俺の布団）にいるんだよぉぉぉぉぉぉおおおお！！！！」

くっそっ！

起きやしねえ！

妹「…う~ん…お兄ちゃん……だめだよ…ｚｚＺＺ」

俺「お前は一体どんな夢を見てるんだ！！！？」

一応俺も変な誤解を受けぬために言うが！

俺は妹に手なんか出さないって！！

その時だった、いきなり俺の部屋のドアが開きッ！！！

姉「うっるっせーぞバカヤローーッッ！！」

姉がドアを蹴飛ばして部屋に入ってきた。

一応、僕の姉である。

年的にはあまり離れてはいないのだが、コイツ、陸上やってるだけあって、脚力すげーんだよ。
そんな姉がドアを勢いよく蹴ってあけたらどうなるか分かるよな？
もちろん、木片になる。
俺「馬鹿ヤローッッ！！今月だけでお前三回もドア壊してんじゃねーよ！」
姉「ッッ！？なんで妹がここにいるんだよーッ！！」
俺無視！？
ってかもうドア無くてもいいや……
姉「まさかお前妹に手を！？」
俺「んな訳n
姉「警察だーッ！！！！」
俺「おいバカ！ナニ考えてやがる！？」
姉「警察ダーッッ！！！！！」
俺「ハーゲン？」
姉「ダーッッ！！」
なんだかんだで息は合っちゃうんだよ。
まぁ、そんなこんなで姉を食い止め、理由を説明すると
姉「ッ！？無意識の内にだって！？」
まったく話は聞いてないようだ
俺「俺がそんな奴だと思ってるのか？」

姉「当たり前だろ！」
俺「おい！少しは悩めよ！！」
姉「え？何処に悩むの？？ねえ」

素で言ってくる姉だった。
俺、何かしたっけ？

姉「じゃあなんで妹がここ（布団の中）にいるんだよ！」
俺「知るか！！俺も起きてから気付いたんだから！」
姉「っていうか、まず妹を起こしましょうよ」

そして、俺が妹を起こそうとして、妹に近づいた瞬間、

妹が目を覚ました

妹「…………………………………」
俺「…………………………………」

起きたら自分が兄のベッドで寝てて、兄が目の前にいたら、
妹はどう思うだろうね？……

妹「キャーーーーーーーーーッ！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

俺「お、おい！落ち着け妹！！」

やべぇ、確実に今の悲鳴ご近所様に聞こえてるよ。
止めてくれ！俺はまだ法廷画にはなりたく無いんだぁぁぁぁぁぁ！！

No，0002　始まりの道（前書き）

何にだって始まりはある。
そう、不幸にも。

No，0002　始まりの道

まぁ、あれから色々あって、俺は、学校へ行った。
今日は新学期の朝であり、入学式の日でもある。
俺の入学する高校は、至って普通の私立校だ。
いや、「だった。」
と、言うべきかもしれない。
それがなぜかというと。
俺「……」
学校が無い。というか、
元々学校があったはずの場所にはなにも無かった。
俺「……」
場所を間違えていないかＧＰＳで確認してみたが、
間違えてはいない。
昨日下見に来た時は確かにあった。
一体ここで何があったのか？
俺「うーん……」
考えても仕方がない、
俺「帰るか」

一回寝てまた来てみよう。
そんな感じで俺は帰路についた

No，0003　新学期！

帰路の途中で俺は知り合いに出会った。

俺「よっ、紗希（さき）」

紗希「おはよー、ってか学校はどうしたの？」

俺「消えてた」

紗希「はぁ？頭も春になったの？」

俺「いや、ねーだｒ

と言おうとして、振り返ったその先に、

学校があった。

紗希「ま、どーせ夢でもみてたんじゃないの？」

俺「……そうかもな」

そう信じたかった。

いや、そう信じたい。

紗希「ッ！？ヤバッ！もう時間なくなるよ！！」

俺「マジかよ！」

そういって俺達は朝からフルダッシュを強いられクラスへと入っていった。

それからすぐに、教師の自己紹介が始まった。

その後、クラスメイトの自己紹介が始まった。

話を聞く限り、俺のクラスは普通の奴らの集まりだった。

面白みのある奴がほとんどいない。

そして、入学式が始まり、校長の無駄に長い話も終わり、無事に入学式も終わった。

そして、放課後。俺は親友の秋(あき)と紗希と帰路に付いた。

家に帰ったのだが、まだ正午だった。
妹も姉もまだ学校のようで家には誰も居ない。
親は亡い
用は自炊である。
いつもは家庭的な姉（あれでも一応そういう面もある）に作ってもらっているのだが
今日は自炊のようだ。

まぁ、色々あって、飯を食い終わったあとは、

俺「暇だぁ～」

というより、眠い、昼寝でもするか……ｚｚｚＺＺＺＺ

No，0004　ハジマリ

俺は、目を覚ました。
というより、覚めてしまったといったほうがいい。
なんせ、俺は外にいたのだから。

「ッ！？」

ここには見覚えがあった。
俺の家から数キロ離れた所だ。
だが、俺が驚いたのは目が覚めたらここにいたからではない。

目の前に、女性がいたからだ。
だけど、俺が驚いているのは、その女性の、

下半身と右腕がなかったからだ。

血まみれのその女性は、俺にこう言った。

「契約を、結んで」

その意味が、俺には分からなかった。
だけど、俺はその女性を助けたいと思った。

俺が、その女性に手を差し伸べようとした瞬間、何かが起きて、俺の意識は落ちた。

No，0005　ユメ

そして、俺は、心地よいベッドの上で目が覚めた。
あのまま丸一日寝ちゃったか…
そして、あのこと《女性》を思い出して、

「なんだ……夢か……」

そのときだった、

「ご気分の方はよろしいでしょうか？」

知らない男性がいた。
というか、ここ、俺の家じゃない……
豪華な屋敷みたいだ…

「…ここはどこなんだ？」
「魔界でございます」
「…まかい？」

ということは、もしかして、

「俺…死んだのか？」
「いいえ、死んではおりません」
「じゃあなんでここに…？」
「貴方が王女さまをお助けになられたからでございます」

あの女性が王女ってだって？
まぁ、ここまで来たら全部信じるしか無いのか。

「女王さまがおよびになられております」
「俺を？」
「ええ、貴方をです」

そして、この執事らしき男に導かれて、
俺は女王の所に着いた。

「汝が娘と契約を結んだ者か？」

俺はあの時の事を思い出しながら答えた

「ええ」
「汝の属性は？」

属性？
なんだ属性って？

「…汝の手を見せよ」

改めて自分の手の甲を見ると、変なマークみたいなものがあった。
それを数秒女王は見つめると、

「…新種だ」

と驚いている。

「そんなに珍しいものなのか？」

と聞くと、女王は

「…一万年以上生きたがこんなものを見たのは初めてだ」

そんなに珍しいのか……

No，0006　オウジョ

俺が手の甲にある属性とやらを見ていたら、
あの女性、否、王女が来た。

五体満足の状態で、だ。

「なんで体が…！？」
「戯(たわ)けが、そのための契約だろうが」
「というか、契約って、いったい何のためにするんだ？」
「自分の護衛を作るためにだ」

そういうことなのか。
あれ？でも、

「じゃあなんで体が元に戻るの？」
「別に元に戻った訳じゃない、今は一時的に貴様の力を借りているだけ」

じゃあ、やはりあの時に王女は死にけかけていたのか……

「だけど一体何があってあんな事になってたんだ？」

俺の一番の疑問である。
そして、その答えの驚きも今までで一番だった。

「天使にやられたからよ」
「は？天使？」

あの優しそうな天使が？

「だって私達は悪魔なのよ？」

ああ、なるほど。
そういうことなのか。

まぁ、それから分かった事は３つ。

１つ目は、手の甲にある模様の名前が『ギア』と言う者である事。

２つ目は、属性というのは能力のようなもので、全１００００種類あるが、
その中のどれにも当てはまらない『新種』が俺である事。

３つ目が、今から俺の能力を調べられるという事である。

No，0007　ブレード

「ふぅ～」

やっと調査が終わったそうだ。
そして分かった俺の能力は有り得ないようなものだった。

相手の力を奪い、進化してゆくという能力。

そんな反則じみた能力が『新種』だった
だが、今の時点ではまだ高速移動程度しかできない。
なので、武器を買った。
俺の身長と変わらぬ長さの剣を。
太く、重く、扱い易い剣を買った。

そして、城に戻ったら、さっそく使用人達の能力を頂き始めた。
そして、その後、対天使用の訓練を行い、一日を終えた。

そして、次の日の朝、事件は起きた。
天使が襲撃してきたのだ。

もちろんその天使の力を奪った。
そして、訓練通りに天使を殺した。

殺す。という事には、さすがに抵抗はあったが、そんなことも言ってられないような状況だ。

そして、また、対天使用の訓練をして、一日を過ごした。

そんな日々の中で俺は思った。
このまま俺の能力が進化し続けたら
最強になるのでは？
と。

No，0008　最強

あれから一年の月日が過ぎた。
俺は、もう、最強と言っていいほどの力を手に入れた。
進化の最終地点にあったチカラ、ベクトルコントロール。
熱、電子、分子、粒子……の、全ての向き(ベクトル)を操れるチカラだ。
このチカラを手に入れるためだけに俺は今まで頑張ってきた。
そして、今日、ついに天界へと行く日が来たのだ。

しかし、俺の予想以上に、天使達は弱かった。
俺が強くなりすぎたのだ。
そして、天使の王である、奴の元へたどり着いた。

「な……」

そして言葉を失った。
なぜなら、天使王の契約者が

「なんで緋聖(ひせい)がここにいるんだよ！！」

俺の姉だったから。

「別に貴方だけが契約したんじゃないんだよ
私だって契約したのよ！」

つまり、俺の姉をこの手で滅ぼさなきゃならない。
他に道があるのか？

姉を救う方法が。

「……」

俺は無言で姉を倒した。

契約を解除するという方法で。

ベクトルコントロールをして、契約前の姉に戻しただけだったのだが、

そこまで出来れば、もう、十分だった。

残るは、天使王のみ。

「……」

俺は腕を振った。

ただ、それだけのことで、天使王の全てが、終わった。

あれから、俺は、現世、
元いたセカイへ帰った。

俺のギアは残したままで。
なぜなら、

俺にとって、何よりも大切な?あの人?を守るために。

そのために、俺は、帰って来たんだ。
このセカイへ。

「ただいま」

久しぶりの自宅だ。
まぁ、こっちの方では3日ほどしかたっていないのだが、
そして、俺はある事を思い出した。

「学校忘れてたぁぁっぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!」

幸い今日から学校なのだが、今までの疲労が溜まっているのだ。

現世にくるのに、ただでさえ凄い体力を使っているのに、

これから悪夢の学校である。

頑張れ俺！！

No，0010　セカイ

あれから結局、学校へは行ったが、これから暫くは帰って来れないというか、
帰ってくる気もないので、学校には風邪を引いたと、伝えた。

さて、これから俺がこのセカイへ来た理由を済ますか。
まぁ、その理由というのは、俺の契約者、王女がこのセカイへ来てしまったからだ。
だから、迎えに来た。
リストゥア(王女)を。

まぁ、俺の探査能力を使って、すぐに見つける事は出来たのだが……

「え……？」

驚いたのはリストゥアではない、俺の方だった。
なぜなら、

「お……幼くなって…ないか？」

幼くなっていた。
中学生くらいに。

「いつものが老けてたみたいな言い方だな」
「いつもの？」
「正装だよ」

……あれって魔界の正装なのか……
まぁ、いいや
今はリストゥアを連れ帰れば良いのだ。

「さぁ、帰るぞ」
「うぃー」

その後、俺達はあの城に帰ったのだが……

No，0011　学校

帰ってきた俺達に向かって女王は開口一番、

「学校へ行ってみないか？」

は？、学校？

こっちにもあるのか。

「なぜ？」

「決まっているだろう、貴様にこちら側（魔界）の知識を付けてもらうために、だ」

「私も行くのですか？母上」

「もちろんだ。」

というか、俺は行く事が確定されてるな…

「というか、その学校は何処にあるんだ？」

「あれよ」

リストゥアが指差した方向を見ると、そこには巨大な建物があった。

建物というか、太い柱みたいなのが……

「アレが学校…？」

「ええ、そうよ。まぁ、アレはほんの一部だけどね」

「一部って？」

「今日は曇ってって見えないけど、あの上の方が膨らんでて、食堂とか訓練所とか色々あるのよ。

さらにその上の方には屋上広場があるのよ」

うわぁ……あっ(現世)ちとは比べ物にならないレベルだよ……

超面白そう！

「さぁ、二人とも、もう手続きは済ませてあるから行ってらっしゃい！」

「んじゃ、行ってきます」

そして、俺の新たな学園生活が、始まる

No，0012　喧嘩

学園に着いたはいいのだが、落ち着かない。
広い園内探索をしようとしても、
やはり落ち着かない。

原因は簡単。

俺が超有名だからだ。

あの大天使を“無傷”で倒した男。

そんな奴を知らない奴は全校生徒で知らない奴はいないらしく、
行く先々で尊敬の眼差しを受けている俺だった。

「……うふふ」

俺じゃないぞ、リストゥアだ。
というか、

「どうしたんだ？」
「いやぁ、私有名人じゃん…」

まぁ、一応契約者（主人）であるからそうかもしれないが……

そして、お楽しみの屋上、天空広場に来た俺だったのだが……

不意に、誰かが話しかけてきた。

「テメェがあの新入生か？」

「ああ、そうだ」

「今からタイマンをしろ」

「はぁ？」

タイマンって……

「お前確実に死ぬぞ？」

殺さないようにする方が大変なんだよ。

「ハッ！、俺のギアをなめるなよ、俺のギアは全ギアの中で最強と言われる能力だぞ？」

そんなことはどーでもいいが、

「まぁ、売られた喧嘩は買う」

それが俺のやり方だ。

「そうか、じゃあ…」

奴の姿が消えた。

「死ね」

声は後ろから聞こえた。

だが、振り返る必要は無い。
反射能力を使うだけで終わる話だ。
ゴキャッ！という不気味な音を立てて吹き飛ぶ少年。
そして、最強である事を証明してみせた。
その少年に。
「安心しろ、死にはしない。」
そう声をかけ、俺は天空広場から飛び降りた。
高さは、軽く数キロ。
俺の能力を使えば、傷一つ付かずに降りれる。
用はスカイダイビングだ。
これが楽しみでここまで来たのだ。
まぁ、そんなことをしながら、教室へ入った。
最初は凄く驚かれたが、まぁ、特に気にするような事ではないのだが……
問題はリストゥアのほうだった。
「いきなりあんな高いとこから降りるなーーーーっ！！！！！！！！」
まぁ、確かにあの高さから降りたら怖いよな……

数キロ。

No，0012　喧嘩（後書き）

こんなことが起きて欲しいなどの要望があれば出来る限り答えて行きます！

No，0013　ギア

それから、授業が始まった。
授業内容は、至って普通で、
能力についてのことなどだった。

そして俺が分かった事は2つ。
1つ目は、ギアは手の甲にしか現れないという事。
そして2つ目は、俺の“左目”にギアがあったこと。

赤黒いギアが、俺の“左目”にあった。

なぜ、このギアがあるのかは、分からない。
まぁ、リストゥアに聞けば分かると思い、
学園から帰ってから聞いてみると……

「なに？目にギアだと！？」
「ああ、なぜだか分からないか？」
「……」

リストゥアが珍しく黙っている。

「やっぱ『新種』なのか？」
「……そのようだな。だがしかし、問題はそこではない。

なぜ目にギアがあるのか、そしてなぜ二つもギアがあるのか、だ。」
「目にはギアは現れないのか？」
「いや……普通は……」
またも珍しく煮え切らない。
だが、そのワケは、
「天使にしか現れないギアだ。」
「は……？」
“天使”にしか現れない……？
「貴様、天使と契約したのか？」
「そんなことはしていない！」
「そうか……しかし何故だ……？」
なんで俺に“天使”にしか現れないギアが……？
「貴様が前に天界に行ったときに何かあったか？」
「いや……特にない……」
「……天使のギアについて、調べてみるか……」
「手伝おうか？」
「いや、貴様は部屋で安静にしていてくれ、何か起きるか分からんからな。」
「……ああ、分かった……すまない…」
「気にしなくてもいいさ、貴様は私の恩人なのだからな」
「ありがと……」

そして、俺は部屋に戻った。

いったい…俺の目のギアは…何なんだ？

No，0014　右目

「……朝か……」

どうやらいつの間にか寝ていたようだ。
ベッドから降りて、リストゥアに会いに行かなければ。

そして、俺が聞いたリストゥアの声は、
予想外のものだった。

「増えてるーーーーッ！？」

な、何が増えてるの！？
あ、もしかして、

「体重か？」
「違うーーー！！」
「じゃあなんだよ？」
「右目よ！！」
「はぁ！？」

リストゥアの持っていた手鏡を使い、
俺の右目を見てみると、

「マジかよ……」

右目の色が青白くなっていた。

そして、“ギア”があった。

「昨晩何かしたのか？」
「いや、俺は何もしていない……」
「新種……しかも、悪魔にしか現れないギアだぞ、それは」
「今度は悪魔か…」
「まったく貴様の体はどうなっているんだ、
ギアを三つも持っている上に、天使、悪魔特有のギアを持っている
など…」

確かに、今の俺は、青白い悪魔の目と、赤黒い天使の目を持ってい
る。

だが、能力はまったく分かっていない。

「他の所にもギアがないか調べてみるか」

と、リストゥアが言った。

まぁ、一応調べてみる価値はあるな、と思った。

だけど、そんな俺の思考は一瞬で吹き飛んだ。
リストゥアの一言で。

「よし、脱げ」

心臓が止まるかと思った。

「ばっ、馬鹿かお前は！？」
「そ、そうゆう意味じゃない戯(たわ)け！」
まぁ、結局脱がされて、ギア探しをされた。
そんなことをされている最中に俺は思ったのだが、
意外と可愛いな、リストゥア。
いや、今までこんな至近距離で見つめたこと無かったからさぁ。
まぁ、リストゥアは俺の目のギアを見ているだけなのだが。
リストゥア、萌え。

「……何を考えているんだ貴様は……」
「ななにををいいっているんだだ？」
「はぁ……まったく何を考えているんだか……」
「な…まさかお前の能力って……」
「ああ、心情把握と瞬間移動だ」
「心情把握ってことは……」
「さっき貴様が思っていた事は全部筒抜けだ」
「うわぁぁぁぁっぁぁあっぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！」
そういって俺はリストゥアの部屋から逃げたのだが……

No，0015　リストゥア

リストゥアの部屋から出た俺。

しかし、出た瞬間、女王に会った。

その時気づいたのだが、今の俺は、

上半身裸だった。

「ッ！？娘に何をされた！？」

もの凄い誤解をされている。

まぁ、確かに、娘の部屋から上半身裸の男が叫びながら出てきたら

誤解されるな…

そして、当のリストゥアは、

「ご、誤解だってお母様ーーッ！！」

と、色々言われているようだった。

そして俺は部屋に戻った。

なんだか眠い……

寝るか……ｚｚＺＺＺ

それからどれくらい経っただろうか
外を見てみると、闇だった。
「…もう夜か…」
そういって身を起こそうとしたのだが、なにが横にあった。
暖かい何かが。
横を振り返ると、そこに在ったのは。

No，0016　3月7日

「り…リストゥア…？」

俺のベッドの中になんでリストゥアが…？

ま、まさか、俺、無意識のうちに！？

「戯けが、私から入ったのよ」

……ついにリストゥアにも発情期が来たのか……

「それを言うなら思春期だっ！！

それじゃ私が欲求不満でベッドに入ったみたいじゃないか！！」

「え？違うの？」

直後、俺の体が宙に舞った。

そして、無防備な俺に、リストゥアの鉄拳が飛んでくる。

結局、あれから数十分ほど殴られた俺は、

再びベッドに戻り、入った理由を聞いてみた。

「話があるからよ」

「なんの話？」

てっきりギアの話かと思っていた俺だったが、
予想外のことをリストゥアは言い出した。

「結婚のこと」

は？結婚？

「誰と？」

「隣国の王子と」

正直、結構凹むなぁ……

「なんで凹むの？」

「まぁ、色々あるんだよ」

「まぁ、その人とは合った事はないんだけどね」

「なんで？」

「母上が今度紹介するって言ってた人だから」

なんだ、じゃあまだ結婚するって決まったワケじゃないじゃん

「ってか、なんで急に結婚なんてするんだ？」

「私か女王になるために」

「あれ？そういやお前って年いくつなの？」

「ん～と、今日で１４才だけど？」

「その年で女王に！？」

「まぁ、ちょっと幼いかな」

「ってゆうか、その年で結婚…？」

「こっ魔界ちじゃ普通よ」

「ここは楽園か！？」

「…何故、楽園？」

まぁ、そんなことを話しているうちに、

もう朝です。

ほぼ徹夜で学園か……

No，0017　理由

あれから、学園に行った。
授業をサボりたくなるような気分だったのだが、
授業内容を聞いて、そんな気は晴れた。
教師が休んだため自習だったからだ。

まぁ、かといって、帰る訳にも行かず、俺の両目のギアについて調べる事にした。

しかし、この学園の図書室は、本当に大きかった。

本棟から少し離れた所にある図書館なのだが、
大きさが有り得ないサイズだった。

大体、数万ｋ？の面積はあった。

その中から、自力で本を探していたら一生が終わるレベルなので、
館内のいたる所に検索機が置いてある。

まぁ、その検索機を使い、俺の両目のギアに関する書物はないか調べたのだが、
ヒットした書物は。

「一冊、かぁ……」
「原因が分かればいいでしょ？」

「まぁ、そうだけどな…」

そういって、俺達はその本を読んでみて、分かったことは、

無かった。

やはり、こう言う事例も“新種”のようだ。

「まったく、貴様は謎だらけだな」

「それを解くために頑張っているんだろうが」

まぁ、そんな事をしているうちに、今日の授業は終わったらしい。

なので、俺達は城へと帰った。

結局、今日も何も分からなかった。

No，0018　温泉

まぁ、それから城に帰った俺は、原因を考えるため、リストゥアの部屋に行ったのだが……

「よし！気分転換に温泉入ろう！」

と、リストゥアが言い出した。

確かに、効率は上がるかも。

「私は準備してからいくから」

「んじゃ、俺が先に入ってくる」

そういって、俺は部屋に戻り、着替えを取ってから、温泉に行った。

この城に温泉は、二ヶ所しかない。

片方はバ（女王）ばア用で、もう一方はリストゥア用である。

俺が使っているのはリストゥア用の方だ。

でも、混浴はしてない。

まぁ、温泉の広さが、もうかくれんぼとかしたら見つからない級だから、

隠れててもバレないような気もするが、気が引ける。

というか、リストゥアって心情把握能力があるから、一発でバレる。

「会ったら終わりだ」

まぁ、そんなことは、考えてはいないのだが。

ってか、リストゥアって意外と胸が……

御愁傷様です。

って……あれ……？

「なんでリストゥアがここにいるんだよ！？」

「戯け、準備してから行くと言っただろうに」

「ってか、準備って何の準備？」

「水着だよ」

……やべぇ、今、俺、普通に温泉入ってるんだが……

つまり全裸である。

リストゥアが入ってくるなんて考えてなかったし……

「なっ！？み、水着を着ろ！」

「持ってねえよ！」

結局、　俺達は後日、水着を買いに行く事になった。

ちなみに、混浴したということが、女王にバレたということは、
また別の話である。

No，0019　カレー

そして、俺達は城から少し離れた所にある町へやって来たのだが…

「結局はただのショッピング目当てか……」

「いいじゃない、たまには」

まぁ、そうでもあるのだが……

「よし！次はあのお店～！」

妙にテンションの高いリストゥアだった。

結局、俺達は昼過ぎまで遊んでいた。

そんな中リストゥアが

「ねぇねぇ」

「ん？何？」

「そろそろお腹すかない？」

「まぁ、確かに腹減ったな」

「それじゃ、帰りましょうか」

「その辺の店で食うという選択肢はないのか？」

何か理由でもあるのかと思っていたら

「私の手作りが嫌なの？」
「それを先に言ってくれ！」

かくして、俺達は城へと帰った。

正直、ものすごく期待している。

「何か食べたいものはある？」
「カレーって作れるか？」
「激辛カレーでもいい？」

笑顔ですごいことをいうな、リストゥア。

まぁ、その笑顔が可愛いから許すか。

「…極辛ね、分かったわ」
「ちょっ！？今の読まれたの！？」

しかもなんだ？“極”辛って。

「出来てからのお楽しみ～」

なんだかものすごく怖い事になりそうな予感がする……

結局、俺の期待は外れなかった。
というか、予想斜め上の料理の上手さだった。

出てきた料理(カレー)が赤いという所を除けば。

「な…なんで赤いの？」

「さぁ？愛情を入れすぎたかしら？」

まぁ、俺のためにリストゥアが作ってくれた訳なので一口食べてみた。

「…あれ？」

「どうしたの？」

「辛く……ない…」

まったく辛くない。

普通のカレーだ。

「それは舌があまりの辛さに狂ってるだけ」

「え？マジ？」

たしかに、辛い感覚が全くしない。

「直す薬あるけど飲む？…めちゃくちゃ辛く感じるけど」

「……飲む」

もう我慢して食べよう。

「じゃあ、目をつぶって」

「なんで？」

「いいから早く」

渋々と目をつぶる俺、

何かされそうで怖い……

だけど、その直後リストゥアが取った行動は……ッ！？

No，0020　まぁ、そんなワケで

そして、リストゥアがとった行動は、

“キス”だった。

まぁ、そんなワケで、

「んーッ！？」

正直いって、驚きじゃ表せないような気分だ。

しかし、当の本人（リストゥア）は、

「ふぅ……舌治った？」

まさかとは思うが。

「薬を口移ししたのか！？」

「そうだけど？」

「なぜ口移しなんだよ！？」

「だって、その薬は他人の酵素に反応させてから飲ます薬だよ？」

うぁぁ、何だよ…そんな薬……

結局、俺はあれから、極辛カレーを全部食わせられた。
はっきり言って、美味しかったけど、

それ以上に忘れられない味が出来てしまった。

No，0021　能力（前書き）

花粉症のせいで目がぁ、メガぁ、痛いぃ！！
だけど頑張って書きます！！

No，0021　能力

あれから、俺は気分転換に、空でも飛ぼうと思い、
能力を使おうとしたのだが……

「……え？」

能力が使えなくなっていた。

俺は、まず、リストゥアの元へと向かった。

少々気が引けるが、今は緊急事態だ、仕様がない。

そして、リストゥアに能力が使えなくなったことを話すと、

「最後に能力を使ったのは？」
「初めて学園に行った日だ」
「つまり3日前か」

3日前と言えば、

「ギアが表れる前だ」
「ふむ……ちょっと目を見せてくれ」

「ん、ああ」

そういって、リストゥアは俺の目を見ると。

「ふふ…やはりな…」

「何がなんだ…？」

「目の色、見てみろ」

リストゥアの手鏡で見てみると、目の色が、

左は、碧色(あお)

右は、緋色(ひ)に、なっていた。

「なぜ…目の色が逆になったんだ……？」

一呼吸置いてから、リストゥアは、言う。

「その理由は…

No，0022　特訓

「それは…進化したからよ」
「進化……？」
「つまり、真価が発現したのよ」

たしかに、イメージ的には、色は合っているが、

「なんでこのギアが現れたんだ？」
「原因は、貴方が喧嘩した相手よ」
「そいつの何が原因になったんだ？」

結局、俺がその後分かったことは、２つ。

１つ目は、両目のギアのせいで能力が暫く使えなくなったこと

２つ目は、悪魔のギアは、喧嘩の時に取り込んだ能力が変化して出来たもので、
天使のギアは、緋聖を倒した際に奪った能力が変化して出来たものであるということだった。

「だけど、なんで能力が暫く使えなくなったんだ？」
「ギアの進化には媒体が必要となる。その媒体が能力なの」
「じゃぁ、媒体にしたギアが強ければ…」

「ええ、確かに最強ね、ただし、鍛えればだけど」
「え？」
「何事も慣れなのよ」
そういって、瞬間移動をさせられ、強制的にトレーニングルームへ連れて行かれた。

…ここには、色々とトラップがあって、迷宮のようになっている。

「まさかここを使う日がくるとはね」
「強制！？」
「それじゃあ、頑張ってね！」
そう言うと同時に、入り口にロックを掛けられた。

……もう、出口から出るしか脱出方法は無い。

No，0023　真実

あれから、俺は、迷宮を抜け出した。

正直言った感想としては、

殺す気満々だな。と、何度も思った。

いや、冗談などではない。

音速以上で攻撃が来るなど当たり前のようなのだから。

まぁ、目のギアを制御できるようになってからは、

迷宮を壊して進んでいったので、一瞬だったのだが…

そんな俺の目のギアの能力は、予想外のものだった。

天使のギアは、移動を操り、悪魔のギアは、全ての力を操る。

そんな、能力だった。

まぁ、単純に言えば、今の俺は、長剣両手に何処でも行ける。ってことだ。

新たに行けるようになったのは、異世界程度だろうが。

でも、長剣を手に入れられたのは、かなり良い。
なぜなら、
長剣に能力を通せるからだ。
普通なら一瞬で壊れるのだが、この長剣は俺の一部みたいなものなので、
能力を通しても、壊れない。
３ｍ？はあるこの長剣に反射を通せば、それだけで
最強の武器になる。
まぁ、そんなことは置いておいて、今の問題は、
異世界があるということだ。

No，0024　門番

まぁ、調べないと何も分からないので、
行ってみる事にした。

「うわ…」

入った途端、目の前にあったのは、城だった。
だけど、そんなことはどうでも良い。

なんせ、目の前に門番がいたからだ。
まぁ、普通なら、驚きはしないが、
そこに驚いたのではない。

その男が目にギアを持っていたからだ。

「誰だ？テメェは？」

まぁ、気づかれた以上は、
殺すしかない。

「そんじゃ、さいなら」

そう言って、俺は剣を振るった。
一撃必殺の剣を。

しかし、その門番が死ぬ事はなかった。
当たらなかったワケではない。

槍で受け止めたのだ。

「ッ！？」

俺が驚く様を見て、門番はこう言った。

「くだらねぇな、もう少しは楽しませてくれよ」

最初は何を言っているのだか解らなかったが、
すぐに意味は解った。

俺の脇腹に、“その槍”が刺さっていたのだから。

もちろん、反射は“使った”

だが、槍は、今も俺の体を抉り続けている。

No，0025　傷

有り得ない。

こんなことが起きるなんて。

まぁ、あれから俺は、リストゥアの元へ返った。

帰ってきた、というより、逃げてきた。

この、俺が。

「……クソ……」

もちろん、俺は、このくらいじゃ死なない。

とゆうか、

“死ねない”

なぜなら、肉体再生能力(神の身体)があるからだ。

まぁ、それでも、痛みはある。

だからこその、“死ねない”なのだ。

まぁ、そんなワケで、今、俺は、
リストゥアと作戦会議中だ。

「で、貴様の反射が効かない相手だった、と」
「……ああ」
「そしてそいつは目にギアがあった、と」
「あれは悪魔のギアだったな」
「武器は？」
「…槍」

そう俺が言うと、リストゥアは得意げに、

「貫通だな」
「…は？」

「つまり、能力無効ってコト」

No，0026　槍

能力を無効にする能力があの槍にはあったらしい。

だが、ならば、

「俺の長剣にはなにか能力があるのか？」

「正確には、それは剣じゃない」

「じゃあなんなんだよ？」

「それは……

俺の武器、それは予想外のものだった。

「…マジ？」

「ああ、試してみればいいだろう」

言われるがままに、俺はその武器を使ってみた。

結局、俺の武器はリストゥアの言った通りの武器だった。

それに、能力も分かった。
その能力は、

身体能力を爆発的に上昇させる。

という能力だった、

ただでさえ異常なまでの身体能力が、
さらにとんでもないことになってしまった…

No，0027　武器

そして、本当の武器のコトを知った俺は、
またあの城へ行った。

そして、また、あの門番に出会った。

「ハッ、また殺られにきたのかよ！」
「相変わらず口が悪いな」

まぁ、そんな感じで、門番が一歩踏み出したのが
決闘の合図だった。

「甘い！」

バギッという音と共に、剣が砕かれた。
門番の剣が、ではない。

俺の長剣が、だ。

「くっ！」

長剣を両方とも折られた。

しかし、

「計画通りだっ！」

そう言って、俺は、長剣のグリップを思いっきり引っぱり、

武器を取り出した。

ツインハンドガン（両手銃）を。

とある伝説の悪魔が使っていたツインハンドガン。

それが、俺の本当の武器。

Ｎｏ，００２８　両手銃

この銃の最大の特徴は、弾だ。
通常の銃とは違い、能力を使って、炎弾を打ち出すのだ。
もちろん、反射も流せる。
威力は関係ない。
一撃必殺の武器なのだから。

だが、この門番には効かない。

じゃあ、

「ゴフぁッ！？」

銃で殴ればイイだろ？

トンファーのような感じで、
銃を上下前後反対に持って殴る。

これなら、能力無効は使えない。

反撃する暇などない、在るのはただ、

圧倒的な力の差、だった。

そして、その場を後にした俺は、

城の中へ入っていった。

No，0029　真実

そして、城の中に入った俺を待っていたのは、

「ば……ババァ…」

女王だった。

「なんで…ババァが…？」

「私がこのセカイの王だからだよ」

じゃあ、歓迎してくれるよな。

などと思っていたが、

なぜ、門番は俺を殺そうとした？

直後、女王の攻撃が来た。

「なッ！？」

気づくのが一瞬でも遅かったら死んでいた。

だが、無事ではない

両腕が無くなっていた。

死にはしない。

死ねないのだから。

「うわぁぁぁぁぁ！！！」

そして、無くなったはずの腕が、

再生する。

No，0030　声

なぜ、ババァが俺を？
そんな疑問が頭をよぎる。

「久しいな、３２６番目の契約者よ」
「３２６番目？」

まさか、

「娘の人数か…？」
「正確には４００以上いるのだがな」

激しい切り合いのなか、俺は答える。

「どうやって面倒をみるんだ？」

「それは、私の能力を使ってに決まってるだろう？」
「何の能力だ？」
「私の能力、それは、」

直後、俺の胸に、後ろから剣を刺された。

決して油断したワケではなかった。

原因は、

「能力無効、そして、分身を作れるの」

隠れていた分身に後ろから。という事だ。

しかも、能力無効の剣を刺されたせいで、再生能力が使えない。

門番の時は、上手く逃げ出せたが、今回はそうもいかないようだ。

そんな俺が最期に聴いた声は、

「それじゃぁ、サヨナラ」

直後、肉（ヒト）を壊す音が響いた。

No，0031　BadBye

「呆気ない最期だったな、　　。」

そうババアが言い放つのと同時に、ババァの身体が弾けた。
別に自殺や他殺されたワケではない

俺が生きているからだ

「油断するなっての」
「なぜ生きている！？」
「あァ？いつ俺が死んだんだよ？」
「ではさっきのは……！？」
「あァ、そうさ、ババアの能力を使っただけだよ」
「しかし私の能力は能力無効だぞ！？」
「それも俺は既に習得済みだ、門番のおかげでな」

冥土の土産に種明かしだ。
だが、それももうここまでだ。

「じゃぁな」

そう言って俺は引き金を引いた。

No，0032　音

『人を殺す事は簡単だ。』
引き金を引けば死ぬのだから。

だけど、それを行うのは一片の迷いも無く引き金を引く機械ではなく下らない情に流される人間だ。
完璧な人間なんていない。だからこそ人なのだ。
そう、俺だって人間だ。

だけど、躊躇無く人を殺した。

別に悪い事じゃない、相手が死ななければならないからだ。
行き過ぎた正義は悪になる。

なぜババァが正義なのか？
それは、ある事実を知っているからだ。普通では絶対に知る事が出来ないはず、いや、はずだった事実を知ってしまう。その真実を知れば、“ある事”を成し遂げられるのだ。
だけど、そんな事はさせられない。俺が、悪だからなどという事ではなく、セカイを壊したくないからだ。
あいつは、本気でその事をやろうとしていた。
だから、殺したんだ。
“あの事”は禁忌（きんき）だ。

天使、それは“僕(しもべ)”だ。
“僕(しもべ)”がいるのなら、“主人”もいる。

神という名の“主人”が

No，0033　13日間

なんだかいつもと違って無駄に帰路が怠かった。
まぁ、能力さえ使えば一瞬で帰れるのだけど、その時の体力の消耗がいつもよりも全然激しいのだ。
結果から言えば、ぶっ倒れた。
城について、一休みしようと思った所でいきなりパタリ、だ。

んで、目を覚ましたら、俺は自分の部屋にいた
おそらくリストゥアが運んできてくれたのだろう。

「……ハラ……減った……」

開口一番が暢気（のんき）な台詞だが、ここ最近まともにメシなど食っていないのだから仕様がない。

なので、料理でもしようと厨房に行くと、リストゥアがいた。

「目が覚めたのか」
「あぁ」
「調子は？」

「最悪」

なんというか、前回目にギアが出た時に似ている感じだ。

「前回のに似ている。ってことは、またギアでも出たのか！？」

「俺は知らん」

「だが、身体にギアなんて出てなかったよ？」

「……ん？……なんで知ってんだ？……」

「お前が気を失ってる間に風呂に入れたのは誰でしょうか？」

「テメェ……」

「まぁ、一応検査でもしますか」

「ってか、メシを……」

「あー、聞こえない」

そんな感じで、俺は１３日間の眠りから覚めた。

No，0034　なぜ？

あれから、色々と調べられて、分かった事は、

「ない」

だそうだ。

「ハァ？マジかよ！？」
「マジで、だ」
「じゃぁ一体なんでなんだか……」
「ただの疲労じゃないの？」
「まぁ、色々あったからなぁ……」
「じゃぁ今日は寝なさい」
「あぃあぃ」
「おやすみ～」

そんなカンジで俺はベッドに入ったのだが、直後、急に視界が歪んだ。
感覚といえる感覚全てがおかしくなるような状態になった。

そして、そのまま俺は意識を失った。

そして、俺が目覚めた時、目の前にいたのはリストゥアだった。

「やっと起きたか」
「…ここはどこだ？」
「これまたベタな台詞だな」
「そんな事はいいから」
「私も分からん」
「じゃぁなんでここにいるんだ？」
「それだって分からん、私だって今目が覚めたんだから」

まぁ、そんなワケで、ここ、どこよ？

No，0035　どうでもいいよ、もう。

とりあえず、今分かっている事としては、
夢じゃない、俺が知らないセカイということと、見渡す限りの草原にいるということだった。

「まぁ、曇天の空だけどね」
「いいじゃん、涼しくて」
「むしろ寒い」
「ってか、まず城に戻る方法を考えない？」
「まずどうしてここに来たかだな」
「私はうたた寝をして起きたらいつの間にか」
「俺もベッドに入ってからだ」

とりあえず、意識がない間に、という事は分かった。

まぁ、そんな事はどうでもいいかもしれない。
いや、もうなにがどうなってもいいと思う。

だって、

目の前でリストゥアの首が飛んだんだぜ？

No，0036　銀髪の男

「…！」

「リストゥア！？」

俺の目の前で、リストゥアの首が吹き飛んだ。
いや、吹き飛ばされたのだ。

「あらら、頭を狙ったつもりだったんですがねぇ…」

突然後ろから声が聞こえてきた。

振り返ると、銀髪の男が立っていた。
炎の吹き出した弓を持って。

「……お前が殺ったのか？」
「ええ、そうです」
「どうしてだ？」
「おや、てっきり逆上でもするかと思ったのですが意外と冷静ですね」
「とっと答えろよ……」
「単刀直入に申しますと、あなたと話をするためです」
「いったい俺に何の話だ？」
「あなたにこちら側（神のセカイ）に来ていただきたいのです」
「俺が？」
「トボケないでください、天界を潰したあなただからこそです」
「俺が入ってお前らに何のメリットがあるんだ？」

「神の体(肉体再生)を持つ者が仲間に加わるのですよ？これ以上心強い事はありませんよ」
「そうなのか……まぁ、いいだろう」
「では、これをお持ちください」
そういってその男はブレスレットのようなものを渡してきた。
「何これ？」
「付けてみればわかります」
「付けたよ。で、どうするんだ」
「地面に触れてみてください」
とりあえず、言われた通りに地面に触れてみた。
「！？」
触れた途端、地面から紫色の何かが出てきた。
「上出来です」
そう言われると同時にゲートの中へ俺は入れられ、またここに来たときの様な感覚に陥った。
「では、行きましょうか、我々のセカイへ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2650r/

まぁ、そんなワケで

2011年10月1日00時34分発行